ゼロの使い魔　風を操るもの

CVK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔　風を操るもの

【Ｎコード】
Ｎ０２４３Ｔ

【作者名】
ＣＶＫ

【あらすじ】
はじめてかいてみました。といっても、ゼロ魔をリメイクしてるようなもんですが。まー、下手でごめんなさい。それでもというならどうぞ。ちなみに学生なんで不定期に更新しようと思います。暇な時に一気にする時もおるし、一週間更新しないかも…。まーがんばります。

異世界？まーいっか

「ここは、どこなんだ？」
「ほんとだねぇ。なんか、周りもまずそうだしね。」
俺の名は、風魔健人（ふうまけんと）。横のちっちゃい妖精はおれの相棒のカノンっていうんだ。俺の周りには、なぜか魔法使いのようなコスプレ？をしている人たちがたくさんいる。なぜ俺がこんなことになったかというとついさっきにさかのぼる。
～回想中～
俺の世界では、魔獣がたくさんいたんだ。なんとかっていう科学者が実験をミスったらしく、たくさんの魔獣が生まれたらしい。まー俺の知ったことじゃなかったんだがな。ちなみに国名は、サジッタっていうんだ。そこで、１５歳以上の男は、魔獣殺しに駆り出されたんだ。しかし、人間の兵器なんかで魔獣が倒せるわけもなく、どんどん人間の侵食されていったんだ。だけど、そこにある力を見つけた奴がいたんだ。そいつにもあんま興味ないんだがな。だけど、俺はそいつをすげー憎んでる。なぜって？そいつのせいで俺の人生が狂ったからだ。その力は、その世界での人間すべてからほんの一握りの人間にしか対応していないらしく運悪く俺がそれに選ばれたのだ。もともとの核はみな同じらしいけど人によって力の種類は違うらしい。火を使ったり、水を操ったりいろんな奴がいたんだ。えっ？おれのは何かって？俺は、風を操ったりするんだ。ちなみに、力を操るものには、妖精がつくんだ。それがカノンだ。いろんなのがいるらしいけど、結構こいつは、可愛いんだぜ。まー、ざっと俺の世界を説明したらこうなる。それでだ、俺は、この力を手に入れて、家族とバラバラの生活を送ってたんだ。だけど、ある時、変な光のが出てきて、いきなり吸い込まれたんだそれがここ。
～回想終了～
「あんた誰よ」

「ん、俺は風魔健人だ。」
「私は、カノンよ。」
なんだこの派手な桃色のブロンドの髪のお嬢様気取りの馬鹿は？
「あんた、どこの平民？」
「サジッタ。」
一応、平民？であってるよなぁ。
「聞いたことのない国ねぇ。」
そう、いっていると、
「ルイズ、サモンサーヴェントで平民呼び出してどうするのよ～」
なんか、誰かがそういうと、周りが爆笑していた。サモンサーヴェント？？
「なぁ、カノン。サモンサーヴェントってなんだ？」
「私が知るわけないでしょ。しかもここ、私たちがいた世界とは全然違うらしいしね。」
「？？なんで？」
「だって、月が二つもあるもの」
カノンが上を見ながらいう。
「ほんとだな～。ま、なんとかなるだろ。」
俺は、もうめんどくなたのでスルーした。
「ちょっと間違えただけじゃないの！」
「あんたいつも間違えてばかりじゃないの。」
「さすがゼロのルイズだ」
なんか、みんな爆笑しまくってる。周りにのまれて俺もつい笑ってしまった。そしたら、ルイズと呼ばれていた女の子が
「ミスター・コルベール！」
なんか、叫んで先生？のような人に向かって叫んでいた。
「なんだね、ミス・ヴァリエール？」
「もう一度、召喚させてください。」
「それは、だめだ。」
ボン、なんか、いきなり下から人がわいてきた。なんだこりゃ？

「いててて、なんだここ？」
変な男が下から湧いてきた。はい？
「なぁ、おまえは、だれだ？」
「んっ、あー俺は、平賀才人。おまえは？」
「俺は、風魔健人。こいつが俺の相棒のカノンだ。」
「よろしく。」
「あー、よろしく。ってなんだ？このちっこいのは？」
「ん？妖精を知らないのか」
「あぁ。」
そこで俺は、そいつに俺の世界のことや、異次元に来たことなどを詳しく説明したんだ。まー、ほとんどカノンが説明したんだけどな。最初は、驚いていたらしいが、何となく理解したらしい。周りは、「平民をふたりもよびだしてるー。」など、ほざいていた。そして、ルイズとかいう奴がこっちに来た。向こうの話は終わったらしい。そして、
「ねぇ。」
「「ん？」」
「あなたたち、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて一生ないわよ。」
「「はい？」」
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、われの使い魔となせ。」
「え？」
「ん…」
一瞬だった。ルイズとキスをしたのだった。よこで、カノンが冷やかしているがそのあとが大変だった。右の手の甲がすごく熱いのだった。才人もされたらしく熱がっていた。
そのあと、なんか周りがギャアギャアほざいていた。わけのわからん文字が俺達の手に刻まれていた。おれは、どうでもよかったが、

才人は気に食わなかったらしく横でルイズともめていた。そんで、他の奴が教室に飛んで戻ったのをみると、才人が驚いていた。まーこいつのいた日本？っていう国のことを考えたら驚くか。そう見ていたら、才人が
「なぁ、健人。」
「ん？」
「俺を殴ってくれ。そんで夢から目覚めさしてくれ」
「わかった。ちょっとこっちにこい。」
才人がこっちに来た瞬間、ドスッ。思いっきり溝のあたりを殴り才人がうずくまっていた。まぁ、当り前か。
そんなこんなで夜には、ルイズの部屋によばれた。才人もなれたらしい。才人もやっと慣れてきて、決心がついたらしく静かだった。才人が見せていた、ノーパソにルイズが興味を持ったらしく二人で話していた。その空気を壊さないようにそっと俺は、部屋から出て行ったのだった。そして、帰ったら、才人がルイズの服を脱がしていた。
「才人。」
「あ、健人か。どした？」
「そこまで進展したのか。」
「ち、違うぞ。なんか成り行きでこうなった。」
その後、才人に過程を説明された。
「もしかして、俺も？」
「もちろんよ。あなたにもしてもらうわよ。えぇと・・・」
「健人だ」
「頼んだわよ。健人。」
そんな感じで一日目の夜が終わったのだった

異世界？まーいっか（後書き）

読んでいただきありがとう。ほんと小説読みながら書いています。こんなんでもがんばりますんで感想とかは、ほしいなぁ、なんて考えています。

次は、プロフです

プロフィール（前書き）

健人とカノンのプロフです

プロフィール

名前　風魔健人
外見　イナズマイレブンの風丸一郎太に似ていると考えてください。
性格　めんどくさがり。
好きなもの　風、刺身など。
嫌いなもの　苦いもの全般　友達が傷つけられること
武器　風を使う。

名前　カノン
外見　シャーマンキングのモルフィンに似てます
性格　おせっかい。
好きなもの　風
嫌いなもの　健人を傷つけるもの
武器　特になし

ちなみにカノンはみんなに見えてますがみんなはスルーしてます。健人は前の世界が嫌だったのでこっちに来てからは、結構楽しんでします。

いろいろ飛ばしているところがありますのでそこは原作を読んでください

プロフィール（後書き）

次回は、結党の場面です。ついに健人の地から明らかになります。
（少しですが。）

決闘か～。懐かしいね。（前書き）

バトル風景を今回は書く予定です。がんばりますわ

決闘か～。懐かしいね。

次の日。俺が起きたころには、才人がルイズの着替えを手伝っていた。
「遅い！なにしてるのよ健人」
「そうだぞ、何度も起こしたのに」
「すまん、俺、朝むっちゃ弱いんだ」
こんな会話が朝からしていた。そしたら、
「おはよう、ルイズ」
「おはよう、キュルケ」
なんか、二人の間に火花が散っていた。そのキュルケと呼ばれる女性？はルイズとは違い背が高く、胸も大きい。世間でいう美女だ。二人の会話を聞いていると二人とも傲慢な性格というのはよくわかった。キュルケのとなりにいきなり巨大が現れた。
「なんだ？」
「うぉ！」
才人とおれは、驚いて二人とも尻もちをした。しかし、ルイズは
「それ、サラマンダー？」
「そうよ、私の使い魔。ルイズは、うらやましいわ。使い魔が二体もいて。」
おれは、なんかめんどくなってきたので逃げようとした。だが、いきなりカノンが飛び出してきた。
「どした？カノン？」
「あの赤髪、健人のこと‘体’って言った。あの女を消すわ。」
健人はカノンの命の恩人である。まーこの話は、また今度にする。
「落ち着けって、おれはいいから。」
「健人がいうなら。」
そんなこんなで、逃げる機会を逃したがなんとか丸くおさまったらしい。ルイズの機嫌は最悪だったが。その時、才人がふと何かに

気づいたらしく
「なぁ、ルイズ？ゼロってなんだ？」
「ただのあだ名よ」
「胸か？」
ドス、ルイズが殴ろうとしたとき、俺が先に殴った。
「グハッ」
「あほかおまえは！そういうのは、たとえ本当でも言うなって。なぁ？」
とルイズに同意を求めた瞬間
「あんたがね！」
ベシンッ！　俺がルイズに殴られたのだった。

食堂につきたくさんのご飯が置いてあった。俺達は
「「うまそぉー！」」
と叫んだが、
「あんたたちのは、これよ。」
指さされた方を見るとパンとミルクが置かれていた。
「ルイズ俺達のはこんだけか？」
「なに？ちゃんと二人分用意してるじゃない。なんか文句ある？」
「「あるわー！」」
二人が言うと
「明日からなしにするわよ？」
「「すみません」」
そうして、三人は食堂から出ると、
「あんたたち、そこで待ってなさい。」
とルイズに言われたので俺たちは、さびしく外でいるのだった。才人がどっかに行ったので健人は寝ることにした。途中で爆発音が聞こえたような気がしたがスルーだ。
何時間経ったのだろうか、周りが騒がしくなっているのに気がついた。

「んー、カノン何かあったのか？」
「あっ健人。向こうで決闘が行われてるの。才人がやってるらしいわよ。」
俺は気になったので行くことにした。ついた時、俺は唖然とした。ぼろぼろの才人に向かって銅像が殴りかかっていた。ルイズは必死に止めていたが、ルイズは近づかない。周りの人間に
「何かあったのか？」
「ん？あー、ゼロの使い魔がギーシュに逆らったんだよ。」
それを見ていると
「謝りなさいよ。」
「いやだね。飯がどんだけまずくてもいい。寝るのも床でもいい。だけど…」
才人が立ち上がり
「下げたくもねぇ、頭は下げねぇ！」
そう言いながら、刀を取ろうとしたときに、銅像が才人をけった。
「何するのよ、ギーシュ。あなたがとれって言ったから才人が刀を取ろうとしたのに何で攻撃するのよ。」
「何を言ってるんだい、ルイズ？僕はとる覚悟があるとわかったから攻撃したんだ。もっとやってしまえ。僕のワルキューレ。」
そう言ってにギーシュのワルキューレが殴りかかった。しかし、その手は、才人には届かなかった。
「おいてめぇ、人のダチに手ぇだして帰れると思うなよ。」
そう言って立ちふさがったのは、健人だった。
「なんだい？君は？あぁ、ルイズの二体目の使い魔か？僕に逆らうのかい？」
ギーシュの言葉は無視。
「こいよ、俺が相手してやるよ。三下が！」
「僕が、三下だとぉぉ！」
そんな中、ルイズに近づく小さな妖精。カノンだった。

「ルイズ？」
「なによ。」
「何で、才人を助けなかったの？」
「だって、あんなのにかないっこないじゃない。私は、魔法が得意じゃないのに」
「得意じゃないから助けなかったの？」
「そうよ、私だって、魔法が使えさえすれば、あんなのに好き勝手させたりなんて。」
「あなた、それ本気で言ってるの？」
「本気よ。」
「あんた最低ね。魔法が使えなかったら才人を使い魔を守れないの？」
「なによ、あんたに何がわかるの！」
「分からないわ。分かりたくもない。健人が何にキレてるかわかる？」
「才人を傷つけたギーシュでしょ。」
「それもあるけど、あなたにもよ。ルイズ」
「何でよ。私は、何もしてないわよ。」
「何もしてないから怒ってるのよ。何で体を張ってでも才人を守らなかったの？」
「それは…」
「健人にも力がなかった。私が守らなきゃいけないのに健人が私をかばっていつもボロボロになるのよ。」
「えっ」
「私が死んでも健人の力は失われない。だけど、健人は死にかけても私を助けた。私は、私が憎かった。力がないからいつも健人を傷つけてばかりの自分に。でもね、健人はいつも私を守ってくれる。私が守らなきゃいけないのによ。笑っちゃうわよね。だけど、それが、いいのよ。あなたもきちんと考えてみなさい。ほんとに力がなかったら助けられないのか？自分の大切なものを失ってからじゃ遅

いのよ。」

健人をギーシュを睨みつける。
「僕を相手にしたことを後悔するが、い、い？」
一瞬だった。健人がギーシュの前に立ちふさがったのだ。
「何に後悔すればいいんだ？三下？降参するなら許すが？」
健人が拳を握る。
「降参し、ま、す」
こうして、決闘の幕が落ちたのだった。

決闘か～。懐かしいね。（後書き）

どうでしたか。
すみません、適当で。次は、友達に原作を借りられ次第書こうと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0243t/

ゼロの使い魔　風を操るもの

2011年5月5日20時25分発行